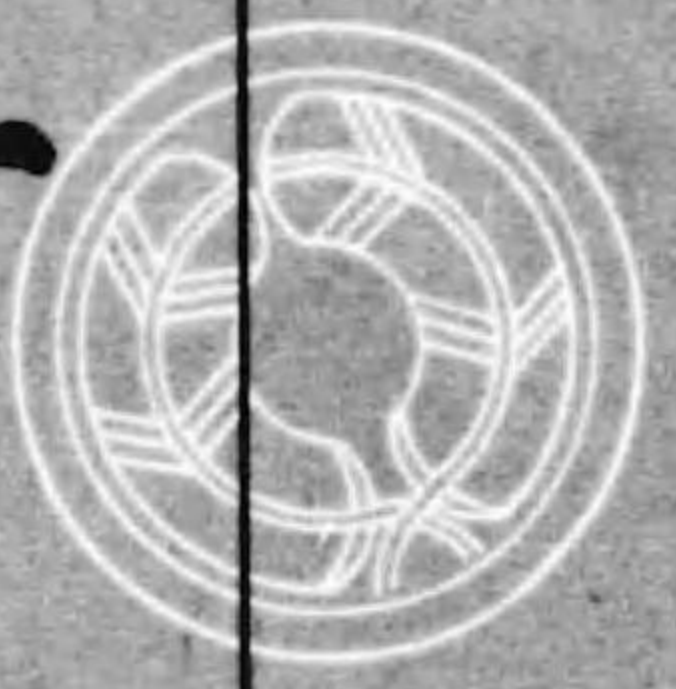


0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10 11 12 13 14 15

特230

414

福澤諭吉先生



始



特230
414

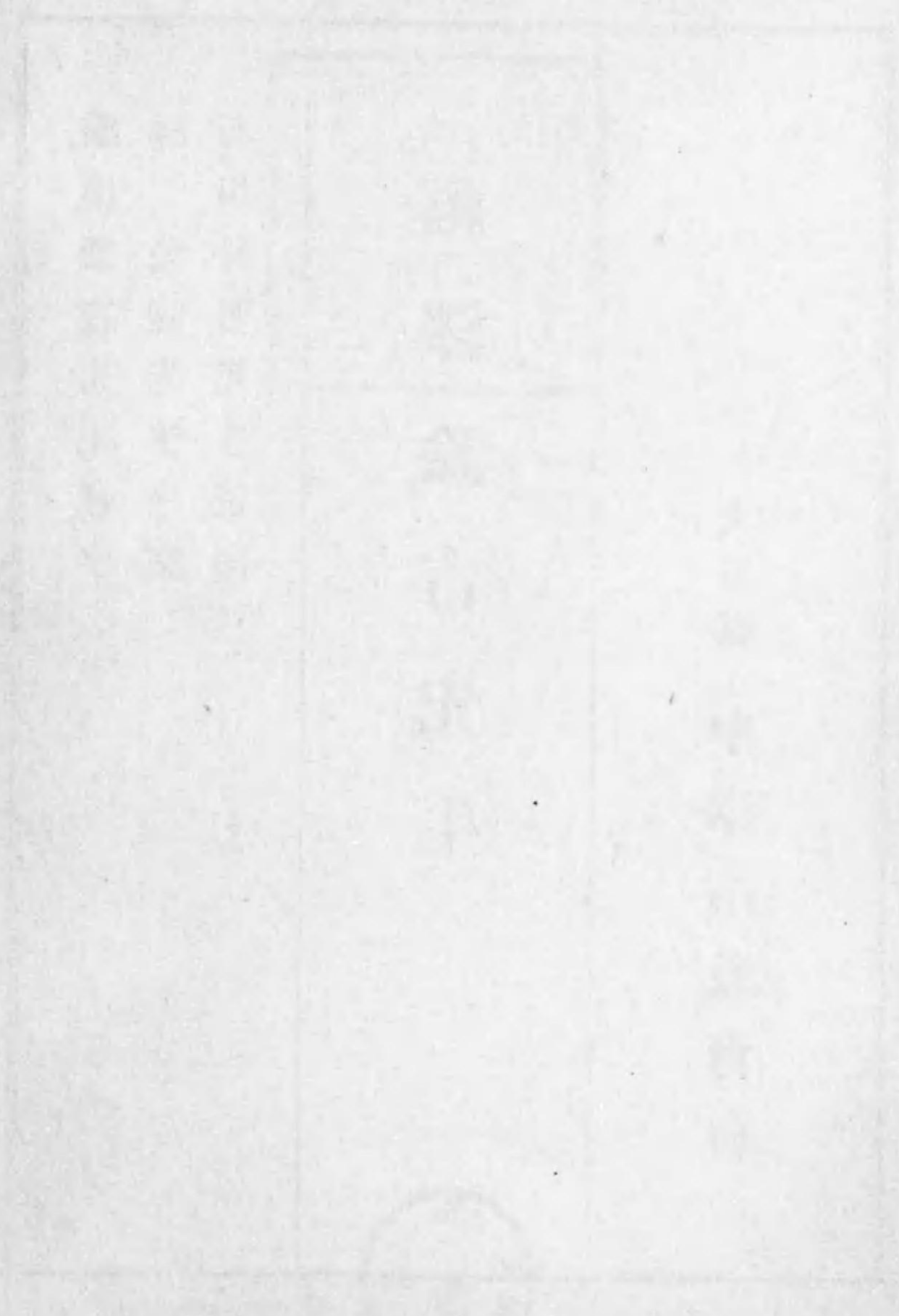
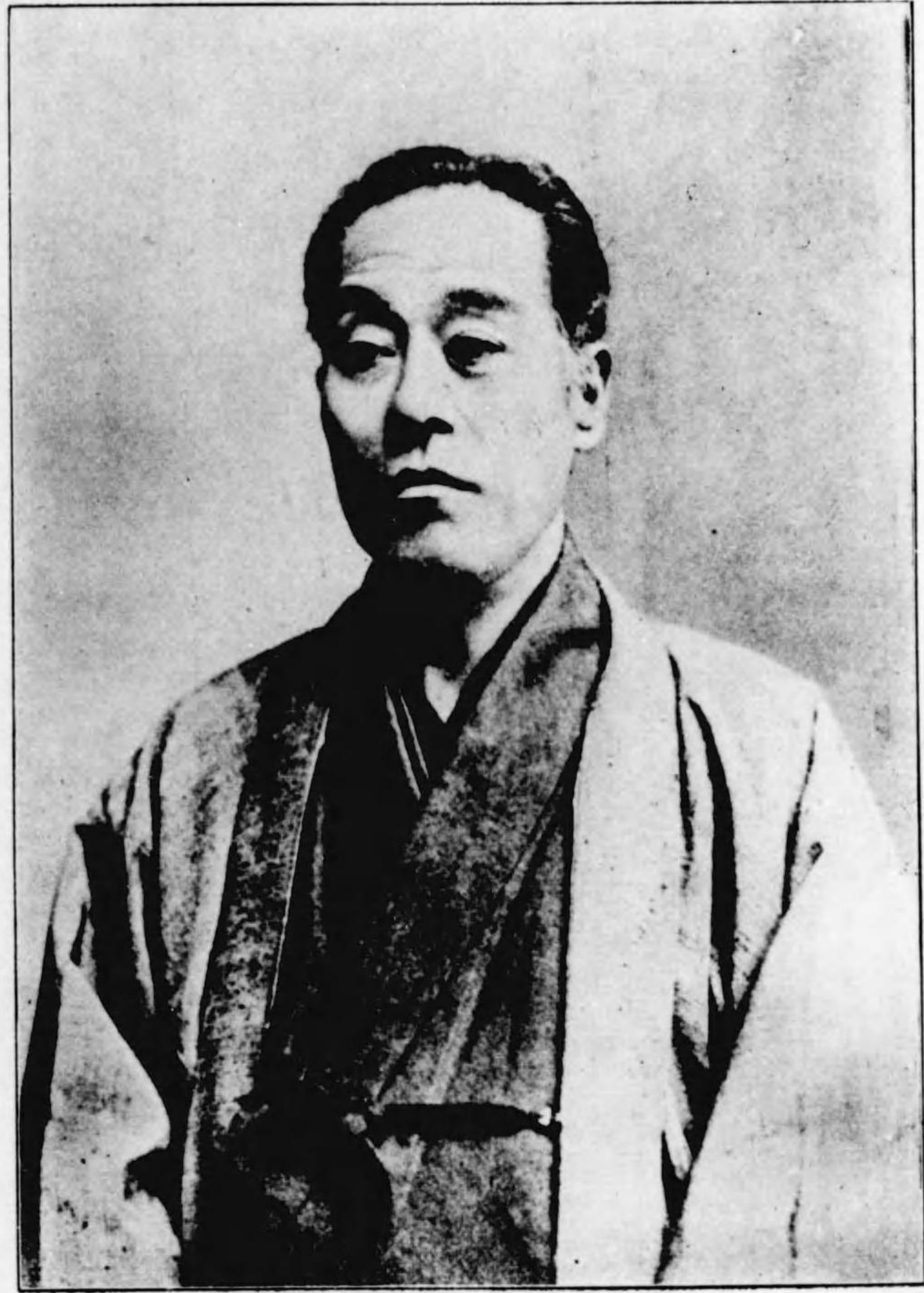
鎌田榮吉先生題字
林毅陸先生序文
石川幹明先生校閱



諭吉先生



大分縣 中津市教育會



自 然
心 之



澄田第吉



前慶應義塾長 鎌田榮吉先生題

序

福澤先生は新日本建設の大恩人であり、其の偉勳は尋常文武俊傑の士の遠く及ばないものがある。又先生の偉大なる人格は、百世の師表として萬人の尊崇をひくものがある。しかも時を経るに従うて、其の功績は益々光輝を放ち、遠くより仰ぎ見るに於て、其の高風は愈々高きを加ふるの感がある。是れ即ち先生の眞の偉人たる所以であると思はれる。

其の事績を廣く一般の人に知らしむるは甚だ有益な事であり、特に青少年に對しては最も然りである。今回中津市教育會に於て、少年のための課外讀物として先生の小傳を募り、之

を出版するに至つたのは誠に美舉と稱すべきである。書中記する所は概要に止まるこはいへ、裨益する所多かるべきを疑はない。

中津には先生の舊邸があり、記念館があり、獨立自尊の碑がある。而して今又此の小傳の出版を見る。薰化愈深くして、先生の流風遺芳を追ふもの益輩出するに至らば、國家の慶福實に之に過ぐるものは無いと思ふのである。乃ち之を記して以て序と爲す。

昭和七年十一月

林 毅 陸

目次

第一	先生の生立	一
第二	長崎遊學	十
第三	大阪遊學	十四
第四	大阪再遊	二十一
第五	江戸進出	二十四
第六	米國渡航	二十八
第七	歐洲見學	三十四

第八	米國再遊……………	三十九
第九	學問の獨立……………	四十三
第十	平民主義……………	四十九
第十一	先生の著述……………	五十五
附	先生の略年譜……………	六十

福澤諭吉先生

第一 先生の生立

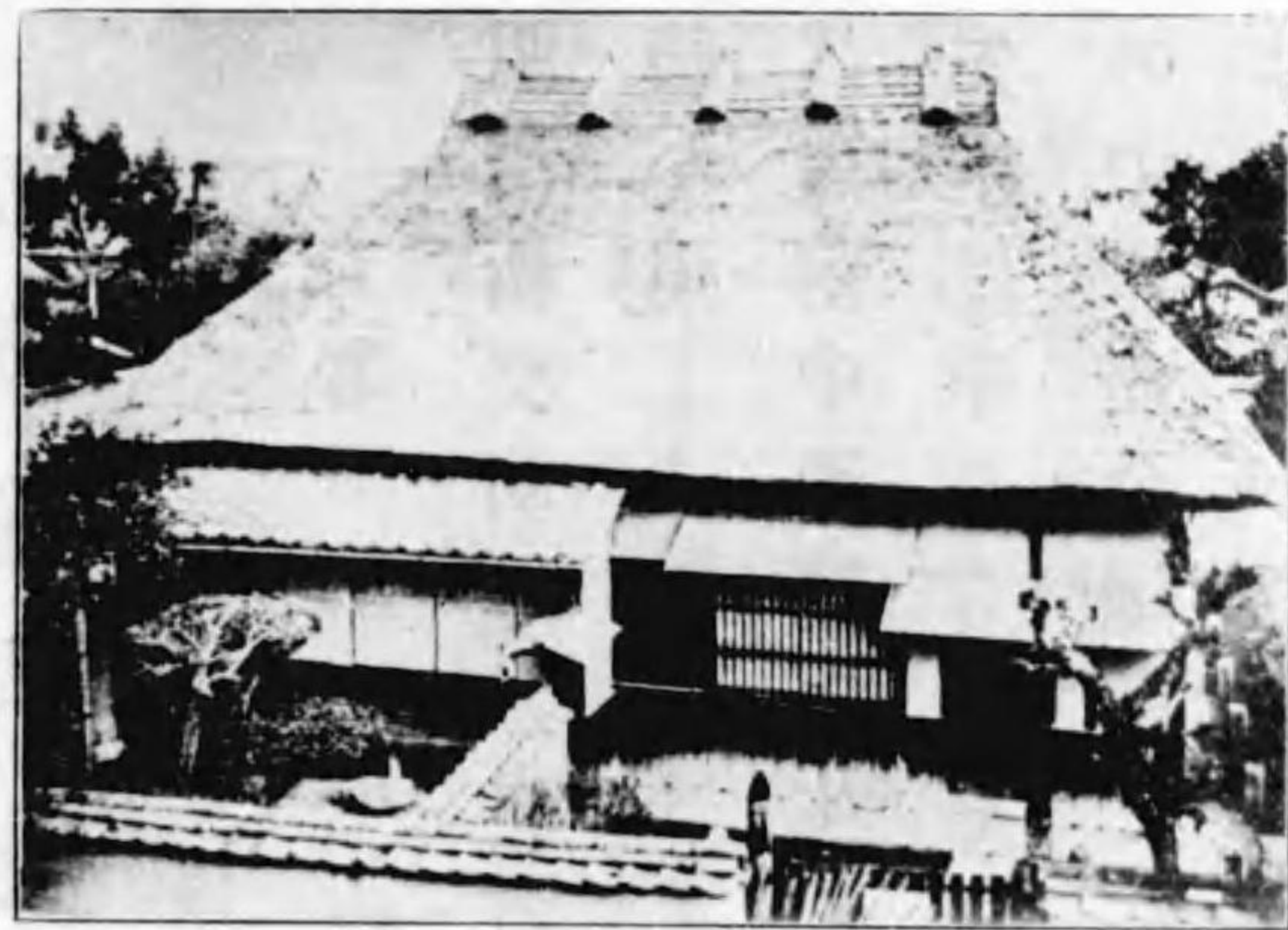
明治新文明の先覺者として、大教育家として偉大な功績を遺し、大平民として一生を送られた福澤諭吉先生は豊前中津藩の生んだ偉人である。

先生は今から凡そ百年前、天保五年十二月十二日、大阪の中津藩倉屋敷で生れた。父は中津藩の士族福澤百助、母は同藩の士族橋本濱右衛門の女順といふ方であつた。

三歳の時、父が病氣でなくなつたので、一家は大阪を引

き上げるこゝこになり、先生は兄や姉と共に、母に伴れられて中津に歸つた。

父は學問が好きで氣品高く、しかも正直で潔白な方であつた。大阪に勤めて居るこゝきも其の地の富豪と交際して、會計のこゝこを司つてゐたが、それらの事は餘り好きでなかつた。本來眞面目な學者であつたから、子供を育てるにも、漢學者風



(町居主留市津中縣分大) 宅 舊 生 先 澤 福

に極めて嚴格であつた。この家風は家庭の間にも遺つて、母を中心として一家の風儀はまこゝこに正しかつた。先生には兄が一人と姉が三人、先生は末子である。一家は至つて平和であつたが、大阪に居つた時とは万事勝手が違つて不便であつたばかりでなく、生計が大變苦しかつた。母はその日々の生活に追はれて、子供の教育にまでは十分手が届かなかつた。

近所の子供等は皆幼少の頃から勉強してゐたが、先生は十四歳になつて、始めて北門通の白石照山先生の塾に通ふこゝこになつた。他の塾生は詩經や書經のやうな程度の高い本を讀んでゐるのに、先生はやつこ論語や

孟子の素讀を習ひ始めたのである。ところが先生は生れつきもの覚えがよかつたので、其上達は非常に早く、くて、ずん／＼學友を抜いていつた。殊に講義になるこゝ、先生の右に出るものがないほどであつた。

白石先生の塾には五年ばかりも通つて、論語・孟子・詩經・書經などを初こして左傳・戰國策・老子・莊子などむづかしい本を學んだ。なほその他史記・漢書・元明史略・十八史略なども讀んだ。中でも歴史に最も興味を持ち、左傳十五卷は通讀するこゝ十一度に及んで、暗記するほど愛讀した。

此の頃家庭の生計が益困難になつて來たので、先生は

子供ながらも、のんきに其の日を送ることは出来ない。勉強の傍あらゆる仕事をして家計を助けたのである。先生は幼い時から手先が器用であつた。例へば井戸に物が落ちた時には、どうして之を引きあげるかを工夫したり、障子をはるのも巧みであつたので親類へ雇はれる事もあつた。疊表が破れた時には自分で之をつかへる事さへあつた。また戸の破れ、屋根の漏りまでも修繕したのである。そして進んでは内職として或は下駄を作り、或は刀劍の細工をして鞘を塗り柄を巻きなごした。その他金物細工なども大變上手であつた。

今、中津市の福澤先生舊邸内には、母屋から二間ばかり

離れた裏庭に、二間に二間半の小さい土蔵の物置がある。此の土蔵なども、先生が幼い時自分で土を練り、壁塗を手傳つたもので、其の二階の三尺四方の窓の下で勉強せられたさうである。

當時世間では學問さいへば漢學ばかりであつたが、豊後の學者帆足萬里の「鐵砲と算盤は武家の重んずべきものである」といふ説が中津にも行はれて、先生の兄も算盤に上達し



福澤先生舊宅の土蔵

てゐたが、其の思想は矢張り堅苦しい漢學者風であつた。

先生は幼少の時から、卜筮呪詛など一切信じなかつた。狐や狸がつくと言ふやうな迷信は、初から馬鹿にして少しも信じない。先生の精神は實にからりこして自由であつた。

先生が中津に居て少年時代から始終不平でたまらなかつたのは、窮屈な門閥制度の壓迫であつた。當時は貴賤上下の差別が甚しくて、公用は勿論私事の交際でも、子供同士の遊びごこでも、上のものご下のものごは言葉遣まで違つて居つた。

先生は子供心にもこの門閥制度に腹が立つてたまらず、自分の一身は、どこに行つてどんな辛苦を嘗めても厭はない。たゞ中津を去つて門閥制度の壓迫を免れさへすればよい。と思つてゐた。

父は先生が生れつき、いかにも丈夫さうなので、此の兒が大きくなつたら寺にやり僧侶にして出世させようと思つてゐた。先生は成長の後にこれを聞いて、

「窮屈な封建門閥の世の中に居ては、どんなことをしても名を成すことは出来ないが、僧侶になればたゞの百姓町人の子でも大僧正になることが出来る。父が私を僧侶にするといふ事は此の意味であらう。封

建制度に壓迫せられて、何事も爲し得なかつた父の苦しい四十五年の生涯を、我が兒の行末を思つてこれを僧侶にしてまでも名を成さしめようとした其の愛情の深さを思へば、封建門閥の制度を憤ること共に、父の心中を察して獨り泣かずにはゐられない。私にとつては門閥制度は親の敵である。」

と語つたことがある。

心身の獨立を全うし、自ら其の身を尊重

して人たるの品位を辱めざるもの、之を

獨立自尊の人と言ふ。………修身要領抄

第二 長崎遊學

先生は二十一歳の時、兄三之助の勧めによつて、蘭學修業のため長崎にゆくことになつた。今まで中津に居て、窮屈なのが嫌でく／＼堪らぬところへ長崎に出かけて、これまで聞いたことも見たこともない新しい和蘭語を學ぶことが出来るので、飛び立つばかり喜んだ。

長崎では中津藩家老の息奥平壹岐が砲術研究のため桶屋町の光永寺といふ寺に在るので、それを頼つて先生はその寺の居候となつて勉強し始めた。その後、山本物次郎といふ砲術家の書生となつて、蘭學の勉強さへ

出来れば本望だこ心を決めて、毎日拭き掃除から飯炊



光永寺 (市長市)

き、上下の仕事、内外の用事、其の他何でも引き受けて、どんな苦痛もいそはなかつた。しかし最も困つたことは、きまつた師匠のいないこと、勉強する暇のなかつたことである。

主人の山本は砲術家ではあつたが、眼病に悩んで居るので、先生は子供の教育、家庭の雑事、又は諸藩から訪ねて来る砲術研究家との應接等一切の

世話を任せられて、遂には山本家に一日もなくて、はな
らぬ大切な人物になつてしまつた。その忙しい中にも
一寸の暇をも見つくるつて、蘭書に親しんだので學力
も非常に進歩した。

ところが先生を世話した奥平壹岐は大家の坊ちやん
育ちで、原書の勉強になる。先生には遠く及ばない。心
の狭い彼は遂に先生を妬んで、邪魔物として中津に追
ひ返す計畫を運らした。そのために先生は母の病氣こ
いふここで早速中津に呼び戻されることになつた。
先生は國許の親類からの手紙で、其の計畫を知つて大
いに憤慨した。しかし「今家老と喧嘩をした所で負ける

に決つて居る。」と思ひ直して、奮然江戸遊學の志を起し、
「誰がおめく、中津に歸るものか。」と怒りながら、奥平に
對しては表面中津に歸るやうに話して、斷然長崎を去
る決心をしたのである。

自ら勞して自ら食ふは、人生獨立の本源

なり、獨立自尊の人は、自勞自活の人たら

ざる可らず。……修身要領抄

第三 大阪遊學

先生は家から送つて貰つた僅かばかりの學資の残り
と、和蘭の辭書を賣つた金で旅費を作り、丁度來合せて
ゐた中津の鐵屋總兵衛といふ商人と共に長崎を出立
し、其の夕方諫早に着いた。こゝで江戸行の事情を打明
けて、中津の母への傳言を頼み、鐵屋と別れて丸木船に
乗り、翌朝佐賀に上陸した。こゝから小倉へはどう行く
か。道聞きながら三十里の道程をたどりたどつて
漸く三日目に小倉に着いた。

それから下關に渡り、大阪行の船に便乗した。先生は旅

費が足りなくなつたので、船中の費用は大阪に着いた
ら、すぐに中津藩の倉屋敷で支拂ふといふことにして
乗せて貰つた。金のない淋しい船旅を十五日ばかり續
けて、やつと大阪に着いたのは安政三年の三月であつ
た。

此の時、兄の三之助は父の職を繼いで倉屋敷に勤番し
て居つた。久方振りに面會して江戸行の次第を話すと、
兄は弟が出し拔けに大阪に來たことをこがめた。

「長崎から來るのになぜ中津の母上の許に立寄らず
に來たのか。私が此處でお前に會ひながら、江戸へや
つては如何にも母に相濟まぬ。母の事もよく考へね

ばいけない。それに大阪にも蘭學の師匠はありさうなものぢや。大阪で學ぶがよい。」



生先庵洪方緒

こ言はれるので、蘭學の師匠をさがして緒方洪庵といふ立派な先生のあることを聞き出した。そこで大阪に留まつて勉強するここになつた。

先生は長崎では規則正しい修業は出来なかつたが、今大阪に来て緒方の塾に入つて始めて正式に研究する

ここが出来るやうになり、専心勉學に勵んだ。人生の行路は常に平かなよい道ばかりではない。受難の多い先生の身の上に更に一つの災難が起つた。安政三年の春、緒方塾の同窓生岸直輔が腸チブスにかつたので、先生はその看病をする中に傳染して、人事不省一週間にも及んだが、緒方先生の手厚い介抱で幸に全快した。九死に一生を得た先生は、病後衰弱の體では到底思ふやうに勉強するここが出来なかつた。また兄もリウマチスを患つて、容易に治りさうにもないので、兄弟揃つて中津に歸つたのは其の年の六月であつた。

間もなく先生の健康は恢復し、八月再び大阪に出て、中津藩の倉屋敷の空屋を借り、自炊生活をしながら緒方塾に通ふことになった。

ところが又も突然不幸が起つた。九月三日兄が病死したといふ急報で、取るものも取り敢へず、早速中津に歸つて見るに、親族會議の結果、先生は福澤家の相續人に決められて居た。

家を繼げば藩の掟によつて、一定の勤番をしなければならぬ。親戚朋友は皆おめで度うく、といつて祝つてくれるけれども、先生は是非いま一度大阪に出て、勉強したい一念を禁ずることが出来なかつた。しかし親類

の者も、藩中一般の者も、家督相續をした上は御奉公が大事だ。蘭學の勉強などは無用のことだ。といつて、相手になつてくれるものはない。唯頼むところは母一人、母さへ承知してくれ、ば誰が何と言はうが怖しい者はない。と決心を固めて、母に再遊の志を打ち明けた。

「お母さん、今私が修業してゐる和蘭の學問は、今から先の日本の國にこつては最も大切な學問です。長崎で其の緒を開き、大阪では折角勉強中でも、もう少しで出來上るところでございます。今これをやめて中津に居ては頭の上る氣遣はありません。私はどんなことがあろうとも中津で朽ち果てようとは思ひませ

ん。お父さんは私の産れたとき、私を僧侶にして學問をさせるこ仰しやつたさうですから、お母さん、お淋しいでせうが、今から寺の小僧にやつたこ諦めて私を手放して下さいませんか。」

母は其の熱心な願を聞いてこれを許したので、先生は再び大阪に遊學するこになつたのである。

天壽を全うするは人の本分を盡す

ものなり。……修身要領抄

第四 大阪再遊

先生は母の許を得て、愈中津を出發するこになつたが、差當り借金がの始末をしなければならなかつた。兄の病氣や其の他で四十兩の借金が出來てゐたので、それを返すために家にあつた書畫、刀劍の類を賣拂つたが、何程の金にもならなかつた。たゞ父の藏書がが千五百冊ばかりもある。中には随分世間に類のない珍しい本もあつたが、中津では適當な買手がないので、舊師白石先生にたよつて白杵藩に買つて貰つた。このほか家財道具全部を賣拂ひ、漸く四十兩の金をこしらへて借金を

返し、母の生活の道もつけて、其の年の十一月大阪へ出かけて行つた。

先生は兄の不幸、家督相續、借金の始末等、家庭の有様を一切打ち明けて、何ぞかして勉強したいと願つた。これから緒方先生の深い同情で、専心蘭學の研究に没頭するここが出来るやうになつた。

當時緒方洪庵は蘭學の大家として學識名望共に天下に高く、其の塾生は前後三千餘人に及んでをり、大村益次郎、橋本左内、大鳥圭介、花房義質、佐野常民、箕作秋坪等は皆此の塾から出た人材である。

入塾以來、先生の勉強振りには到底今日の學生の想ひ及

ぶ所ではなかつた。一所懸命勉強して殆ど晝夜の差別がない。疲れては机の上に眠り、覺めればまた讀む。一度でも本當に枕をして眠るこいふやうなことはなかつた。こんな苦學を三年もつゞけ、學業が大變進歩したの
で、其の塾長にあげられ、師匠を助けて後進子弟を教授してゐたのである。

敢爲活潑、堅忍不屈の精神を以つて
するに非ざれば、獨立自尊の主義を
實にするを得ず。……修身要領抄

第五 江戸進出

安政五年の秋、先生二十五歳の時、緒方塾で蘭學修業の最中、藩主奥平家に召され始めて江戸に出るここになつた。當時、蘭學の研究が次第に流行して來たので、奥平家でも其の必要を感じ、先生を江戸に呼んで蘭學の教授をさせることになつたのである。

先生は江戸に來て鐵砲洲の奥平家中屋敷の長屋に塾を開き、子弟を集めて蘭學を教へるここになつた。これが今日の慶應義塾のはじまりである。

先づ江戸の蘭學者等に會つて話をして見るこ、其の學

力は恐れるに足りないことが分つて大いに安心した。或日、新開港場横濱見物に出かけ、外國人の店に入つて蘭語で話しかける言葉が少しも通じない。又店先の看板も讀めず、瓶の貼紙さへ解らぬ。これでは蘭語は役に立たないといふことを知つて空しく歸つて來て、すつかり落膽してしまつた。

「これはくゞどうも仕方がない、今まで數年の間、死物狂に勉強した蘭語は、何にもならない。商店の看板もよめない。今後はなんでも英語が必要だ。洋學者として英語を知らなければ役に立たない。」と悟つて大いに發憤した。しかし此の頃の英語研究は容易なこころではなかつ

た。
其の頃、江戸に森山多吉郎といふ人が長崎から來てゐて、英語が出来るといふことを聞き、小石川水道町の宅を訪ねて教を請ふことにした。けれども森山は非常に多忙な身であつたため、先生はろく／＼教を受けることが出来なかつた。
やむを得ず辭書によつて獨力で研究することに決心して、いろ／＼探し廻つたけれども、辭書は容易に手に入れることが出来なかつた。やつと其の辭書は幕府の洋學を研究する九段下蕃書調所だけにあることが分つたが、これは借り受けて家に持ち歸ることが出来な

いので大變困つた。

そのうち、漸く英蘭對譯發音附の辭書を横濱で探し出し、代價五兩で手に入れ、千辛萬苦辭書と首引で毎日毎夜獨學自習した。しかし蘭學の力が、英書を學ぶのにも非常に役立つて、其の困難は先生の最初思つた程でもなく速かに上達したのである。

獨立自尊の人は一身の進退方向を他に
依頼せずして、自から思慮判断するの智
力を具へざる可らず。……修身要領抄

第六 米國渡航

安政六年の冬、徳川幕府はアメリカに使節を遣すことになり、使節は米艦で行つたが、同時に軍艦咸臨丸を桑港（まぎ）におくることになつた。咸臨丸は名ばかりの軍艦で、實は僅か百馬力の蒸氣機關を具へた小型の汽船に過ぎなかつた。しかし乗組員一行の意氣込は非常なもので、日本人だけで外國人の手を借らずにこの軍艦を動かして、太平洋を横切つて見ようといふ随分大膽な企てであつた。

乗組員は、軍艦奉行木村攝津守指揮官勝麟太郎を始め



咸臨丸難航の圖

一行九十餘名で、先生は攝津守の從者の一人として米國に渡ることになつた。

咸臨丸は萬延元年の正月、品川を出帆して三十七日目で、二月廿六日桑港に着いた。途中暴風雨がつかいて波が甲板に打上げ、船体は三七八度も傾き、乗組員一同は大變弱り病人同様になつた。其の中に先生は身體の丈夫なため平氣で冗談を言つて皆を笑はせながら、介抱をしたり、雑務を手傳つた。

りして、熱心に働いた。
咸臨丸が桑港に着くと、米國
人の歓迎は非常なものであ
つた。

一行は始めて異國の風物に
接して、目に見るもの、耳に聞
くもの、すべてが皆不思議で
あつた。馬車を見ても分らぬ。
戸をあけて乗ると馬が駈け
出す、成程是は馬の挽く車とわかる。ホテルに行つて見
ると絨氈が敷詰めてある。日本では、一寸四方幾らとい



(港桑) 舍宿の行一丸臨咸

ふ金を出して買ふ位珍しい物を、廣い室に敷詰めて其
の上を靴で歩くから、此方も草履で其の上に乗る。席に
つく酒が出る。徳利の口をあけると恐ろしい音がする。
變に思つたがこれはシャンペンであつた。コップにつ
ぐと何かコップの中に浮いてゐるものがある。口の中
に入れて驚いて吹き出す者もあれば、がりく嚙む者
もある。やつと氷である。ここがわかつて驚いた。三四月
の頃に氷があらうとは、誰も思つてゐなかつたからで
ある。
かうして一行は驚きの中に使命を果して歸朝するこ
こになつた。

此の時、先生はウェブスターの辭書一冊を買つて歸つた。これが日本にこの辭書の輸入せられた始めであつて、先生は「天地間無上の寶を得た」と喜ばれた。

咸臨丸は歸航の途中、ハワイに三四日寄港して、海上穩かに五月五日無事浦賀に着いた。品川を出て約半年の後、祖國の山河を見るここが出来たのである。

一行の洋行中、三月三日に大老井伊直弼が、櫻田門外で水戸の浪士に討たれた事を、先生は浦賀に上陸したとき誰にも聞かない中に言ひあて、大いに人々を驚かしたといふ奇談がある。日本國內の攘夷論は此の頃から益々盛になつて來た。

先生は歸朝の後間もなく幕府の外國方に出仕して外國との往復文書を翻譯ほんやくすることに従事せられた。

己を愛するの情を擴めて他人に及ぼし、其の疾苦を輕減し、其の福利を増進するに勉むるは、博愛の行爲にして人間の美德なり。……修身要領抄

第七 歐洲見學

文久元年の冬、幕府は更に歐洲諸國に使節を送ることになつて、先生はこれに隨行した。第一回の米國行は木村攝津守の從者として渡航したのであるが、今度は幕府の翻譯方の一人になつた。先生は幕府から旅費の外に四百兩の手當を貰つたので、孝養の心からその中百兩の金を郷里に送つて老母を慰めた。

十二月二十三日、品川から英國の軍艦オーデン號に乗つて長崎に寄港し、翌文久二年正月元日、同港を出發していよく渡歐の途に上つた。途中香港・シンガポール・

印度洋・紅海・スエズ・埃及・地中海を経て歐洲に至り、マル



遣歐使節

右京極能登守 中竹内下野守 左松平石見守

セイユ・リヨン・巴里・英國・和蘭・ベルリン・レニングラード・ポルトガルなどを巡遊して、同年十二月十一日、日本に歸り着いた。

今度の使節一行は、正使竹内下野守・副使松平石見守・御目付京極能登守以下四十名ばかりで、日本服に大小を横へてパリ・ロン

ドンが大威張で歩きまはつた。

先生はこの旅行で出来るだけ歐洲文明の状況を視察し、學校・病院を始め會社・工場等の組織設備より政治上社會上の有様まで委しく調査した。

かうして巡視中、先生は力を盡して根ほり葉ほり聞きたくして一々ノートに書きしるした。此のノートこそ後



生先澤福の中歐滯

年先生の著書で名高い「西洋事情」の材料になつたのである。この書は歐洲の文明をよくわかるやうに紹介した開國維新當時の一大寶典であつた。

歐洲の旅を終へて無事に歸つて見れば、日本國中攘夷論の最中で、生麥事件や下關の外國船砲撃や鹿兒島の薩英戦争等の事件が次々に起つて、對外の關係が益々困難になつて居た。そればかりでなく攘夷黨浪士の鋒先は轉じて當時の洋學者の身邊にも向つて來たので、先生の一身も甚だ危険になつた。そこで先生は役所に出て事務を執る外、みだりに人に面會せず、深く其の身を慎んで夜間は外出せず、専ら著述と教育に勵んで

居られた。

人に交るには信を以つてす可し。己人を信じて人も亦己を信ず。人々相信じて始めて自他の獨立自尊を實にするを得べし。

社會共存の道は、人々自ら權利を護り幸福を求むると同時に、他人の權利幸福を尊重して苟くも之を犯すことなく、以つて自他の獨立自尊を傷けざるに在り。……修身要領抄

第八 米國再遊

慶應三年幕府は勘定吟味役小野友五郎を軍艦受取のため米國に遣すことになつた。これよりずっと以前幕府は八十萬弗を出して米國から軍艦と武器を買入れる約束をしてあつた。文久三四年の頃四十萬弗で富士山といふ軍艦一艘を受取つた。今度の使節はその残りの方で軍艦などを買入れるためであつた。先生は頼んで其の一行に加はり、正月廿三日横濱を出帆して再び渡米の途に上つた。

一行は委員長小野友五郎、副長松本壽太夫その他海軍

の人々や通辯等で、華盛頓ワシントンに行き國務長官に面會した。萬事都合よく話がまこまつて、東艦といふ軍艦を受取り、ついでに小銃も買入れて、軍艦を廻航して來るのは米國人に頼んだのである。そして先生は一行と共に六月下旬に歸朝した。

所が先生は間もなく外國奉行から、

「その方儀アメリカ行の御用中不都合の次第あり謹
慎申付くる。」

この命令を受けた。それは先生が米國旅行中、委員長小野友五郎と意見が合はず、度々衝突して其の怒を買つたためである。又塾の教科書として米國から買つて

來た原書入の荷物も、横濱で差押へられてしまつた。これは米國行の手當が多かつたのを、他には少しも使はずに本を買つたので、身分不相應な買物をしたといふ口實であつた。

其の原書の種類は大中小の辭書・地理・歴史其の他法律・經濟・數學等に關する書物であつて、これが我が國の明治文明に大變役立つたのである。

其の後要路の人々の取なしで、やうやく謹慎も許され荷物の差押も解かれて、元の通り外國方に出仕して居たところ、間もなく幕府が倒れて王政維新の大革新が起つた。

第九 學問の獨立

慶應三年十月には徳川慶喜よしよが大政を奉還し、四年正月三日には、鳥羽・伏見の戦が起つて慶喜は海路江戸に逃げ歸り、江戸は何時戦亂が起るかも計られぬやうになつて居た。

この頃、學生は次第に多くなり塾舎はだん／＼狭くなつて來た。その上鐵砲洲が外國人の居留地になつたので、慶應三年十二月新錢座に在る有馬家の中屋敷四百坪を三百五十五兩で買ひ取り、約百五十坪の塾舎を新築して百人の生徒を入れる計畫をたてた。翌年四月工

事が全部落成したので、先生は塾と共に鐵砲洲から新錢座に移つた。

新錢座の塾は古家の建直しもあつて粗末な建築ではあつたが、講堂もあれば寄宿舎もある、食堂もあれば、病室もある、狭いながら運動場もあつて當時の學塾中では實に完備した新塾舎であつた。世間では福澤塾と稱へてゐたが、時の年號を取つて慶應義塾と名づけた。五月十五日には上野に彰義隊の變が起つた。其の戦争の當日、先生がウエーランドの經濟書を講義中急に砲聲が聞え出したので、若い學生等の中には驚いて屋根に登り、彼方此方を眺めて騒ぐものもあつた。其の時先

生は「上野と新錢座とは二里も離れて居る、鐵砲玉の此

處まで飛んで來る氣遣はない。」
 といつて講義を續けて居られ
 た。當時江戸市内の學校中、教授
 を續けて居たのは、唯この慶應
 義塾だけであつた。

「むかしナポレオンの亂に和
 蘭國の運命は盡きて、本國は
 申すに及ばず印度地方まで
 悉く取られてしまつて、國旗
 を擧げる場所がなくなつた。



(田三・京東) 塾義應慶の在現た見らか上機行飛

「こころが世界中僅に一箇所を残した。それは即ち日
 本長崎の出島である。出島は多年和蘭人の居留地で、
 歐洲兵亂の影響も日本には及ばず、出島では和蘭の
 國旗は常に百尺竿頭に翻つて、和蘭王國は曾て滅亡
 したることなし。今でも和蘭人が誇つてゐる。して
 見るに此の慶應義塾は日本の洋學のためには和蘭
 の出島と同様、世の中に如何なる騒動があつても變
 亂があつても、未だ曾て洋學の命脈を絶やしたこと
 はない、慶應義塾は一日も休業したことはない、此の
 塾のあらん限り大日本は世界の文明國である。世間
 には頓着するな。」

と語つて先生は大勢おほぜいの學生を勵ましたのである。明治四年、慶應義塾は新錢座から今の三田に移つた。三田の新塾は地所一萬四千坪、土地は高燥かうそうで空氣は清く、南は品川灣に面して眼を遮るものもなく、眺望のまここによい處である。又本館教室共に廣大で申分のない立派な塾になり、同時に學生も多くなつて、此の移轉のため慶應義塾の面目が一新した。



たれらて建の生先澤福年八治明
(内構塾義應慶)館説演の初最本日

慶應義塾が三田に出來、福澤先生がこゝに住居するに至つて、三田の先生三田の學校を唱へられるやうになり、三田の地は名高くなつた。鐵砲洲から新錢座に、新錢座から三田に移り、此處で義塾の基礎がいよく確立した。世の中も次第に靜まつたので塾の入學生も三百名を越え、四百名となり五百名となり、益々發展して遂に現在のやうな慶應義塾の偉大な規模を見るに至つたのである。

人は自ら従事する所の業務に忠實ならざる可らず。
其の大小輕重に論なく苟くも責任を怠るものは獨立自尊の人に非ざるなり。……修身要領抄

第十 平民主義

徳川幕府が倒れて王政維新の幕が開かれ、大阪に假政府が出来たとき、先生は神田孝平、柳河春三と共に新政府から召されたが病氣を稱して出なかつた。政府が江戸に移つてからも亦度



(園公津中) 碑の尊自立獨

度召されたけれどもやはり應じなかつた。

或時、神田孝平が勧誘に來た。先生は之に對して、

「男子の出處進退はめいくの好む通りにするがよいではないか。君が政府に出たのは君の好きなことを實行してゐるのだから僕も賛成する。僕は役人になることは大嫌ひだ。嫌ひであるから出ないまでだ。まあ僕も自分の好きな通りにしてゐるのだからいゝではないか。」

と言つて強く斷つてしまつた。

又或日のこと細川潤次郎が訪ねて來て、いろく話した末、

「政府の學校の世話をしてくれないか。」

「いやそれはゆけない。自分には何もそんなことは出来ない。」

「しかし君が國家に盡した功勞は政府に於ても只棄て、置くわけにはゆかぬ。なんぞかしてこれを譽めるやうにしなければならぬ。」

「ほめるの、ほめられぬのとは何の事だ。あたり前の仕事をしてゐるのに何も不思議はない。車屋は車をひき、豆腐屋は豆腐をこしらへ、書生が書を読むのは皆あたりまへの仕事をして居るまでの事だ。それを政府が譽めると言ふなら先づ隣の豆腐屋から譽めて

貰はねばならぬ。そんなことは一切止めてもらはう。」
と言つて役人になることも褒賞ほうじやうを受けることも斷つてしまつた。

先生は少年時代に中津の藩を去つて藩の役人を勤めた事がなく、江戸に出て幕府に雇はれたが、これも言はゞ筆をこる翻譯の職人の仕事をしたばかりで、政治に就いては何等關係するところがなかつた。先生は小さい士族の家に生れて門閥制度が嫌ひであつたので、自ら役人となつて威張ることは勿論上官に諂たごふことは大嫌ひであつた。人に屈せず又人を卑めず、何處までも獨立自由の地位に立ち官位も勳爵も望まなかつた。さ

物主の志は身

中津市公會堂の額

うして先生は民間の一平民として教育
 言論を以て國家社會のために盡さうと
 心掛けられたのである。
 しかも其の抱負は甚だ大きく、
 「人間は生れて世の中に立つ以上、なる
 べく大きな仕事をして大きな跡かた
 を残さねばならぬ。三田の臺から品川
 の海を眺めるに、沖には大小の船が澤
 山通るが、あの船の行く跡を見るに小
 さな舟の跡はすぐ消える大きな船の
 跡は何時までも残つて居る。人間も同

じここで、何でも人間の中の大きな人間になつて社
 會に何物かを残さなくてはならない。
 こいつて常に學生等を勵ましてゐた。これによつても
 其の抱負の一端をうかゞひ知ることが出来る。

凡そ日本國に生々する臣民は、男女
 老少を問はず、帝室を奉戴して其の
 恩徳を仰がざるものある可らず。此
 の一事は萬世不易、何人も疑を容れ
 ざる所なり。……修身要領抄

第十一 先生の著述



先生の著書は凡そ百種にも
 餘つて居る。其の主なるもの
 は、西洋事情、雷銃操法、西洋旅
 案内、窮理圖解、洋兵明鑑、英國
 議事院談、世界國盡童蒙教草、
 學問のすゝめ、帳合之法、改曆
 辯會議辯、文明論之概略、民間
 經濟錄、分權論、通俗民權論、通
 俗國權論、福翁百話、福翁自傳。

女大學評論、新女大學等である。中でも「西洋事情」は最も
 有名で、維新政府の新施設も此の書から出たものが多
 いといはれて居る。其の他各種の著書いづれも文明の
 主義を盛んに唱へて、新事物を紹介し人智を啓發する
 目的を以て書かれた。しかも先生は極めてたやすい言
 葉を使つて、通俗に面白く書いてあるので、何人もよく
 これを理解し廣く世に讀まれたので、一般の人心を指
 導するのに大なる効果があつた。
 かうして先生は夙に學問を勧め實業を奨励し、大いに
 民權の自由を説いたが、其の説の由つて來るところは、
 實に先生の胸中熱烈な愛國の至誠に基くものであつ

た。先生は久しい間、封建鎖國の太平に慣れた民心を警しめ、其の氣力を盛んにし國力を充實させ、我が國をして世界列強の競争場裡に在つてよく國權を維持し、更に東洋に於ける先進國としての地位を確保させようさせられたのであつた。其のためには内に官民の協力一致を説き軍備の擴張を高唱し、外に朝鮮の獨立を助け、支那に對する政策を論ずる等たゞこれを筆に記すのみでなく、時に或は自ら其の事に當つて種々盡力せられた。殊に明治十五年に時事新報を創めてからは、政治・經濟・外交・教育・社會の諸問題に就て大いに筆を振はれ、中にも國權伸張の事に就ては最も熱心で、日清戰役

の如きは先生の主張によるところが多かつたのである。

これを要するに、先生は明治の大平民として獨立自尊の主義によつて國民を指導し、常に新文化建設の第一線に立つて活躍した。時にはその熱心のあまりに世間の誤解を招いたことさへあつたが、その強い信念と堅い意志とは、遂に目的を貫いて大業を成就した。我が國が封建鎖國の舊習からめざまめて、文化の惠澤に浴するに至つたのは、先生の功勞によるところが非常に多かつたといはねばならぬ。

先生が老後その門生の先輩に編纂させた修身要領二

十九ヶ條は先生平素の言行に基き、獨立自尊の精神を書きあらはしたもので、國民にこつて修身處世の生ける教訓である。

明治三十三年五月、

明治天皇は先生の著作・教育の功績を思召され、特に金五萬圓を賜つた。先生は此の恩賜金を一身一家に私せず、直に之を慶應義塾の基本金として寄附し、益聖恩に應へ奉ることを期した。



東京大崎常光寺の墓

翌年二月三日、先生は六十八歳をもつて其の偉大な一生を終られたのである。

福澤諭吉先生 終

福澤諭吉先生略年譜

年號	紀元年數	年齢	事	歴
天保五	2494	一	十二月十二日大阪堂島五丁目玉江橋北詰中津藩倉屋敷に生る。	
天保七	2496	三	六月父百助逝く。母子六人中津に歸る。	
弘化四	2507	一四	白石先生に就き漢籍を學ぶ。	
安政元	2514	二一	二月蘭學に志し長崎に遊學す。	
安政二	2515	二二	三月長崎より大阪に出で緒方先生の門に入る。	
安政三	2516	二三	九月兄三之助病死、中津に歸り福澤家を繼ぐ。 十一月上阪再び緒方塾に學ぶ。	
安政五	2518	二五	十月江戸奥平藩邸の招により江戸築地鐵砲洲に蘭學塾を開く。	
安政六	2519	二六	獨力にて英語の研究を始む。	
万延元	2520	二七	一月木村攝津守に従つて渡米す。 五月歸朝、幕府の翻譯方に出仕す。	

文久元	2521	二八	結婚。 十二月遣歐使節に従ひ渡歐す。	
文久二	2522	二九	歸朝。	
元治元	2524	三一	幕府外國方翻譯局に出仕す。	
慶應三	2527	三四	一月幕府の軍艦受取委員一行に加はり再び渡米、六月歸朝す。	
(慶應四 明治元)	2528	三五	鐵砲洲より新錢座に移り塾を慶應義塾と名づく。	
明治四	2531	三八	三月慶應義塾を新錢座より三田に移轉す。	
明治八	2535	四二	五月三田演説館を開く。	
明治一五	2542	四九	三月時事新報を創刊す。	
明治二八	2555	六二	十二月還曆の賀筵を擧ぐ。	
明治三一	2562	六五	九月腦溢血症を發す。	
明治三三	2564	六七	五月功勞により皇室より金五萬圓下賜せらる。	
明治三四	2565	六八	一月病氣再發し二月三日逝去す。 同八日東京麻布善福寺に於て葬儀執行、大崎常光寺の墓地に葬る。	

昭和八年一月四日印刷
昭和八年一月十日發行

福澤諭吉先生 全

定價金貳拾錢

大分縣 中津市教育會

發行者 大分縣中津市教育會
代表者 中里真清

印刷人 大分市碩田橋通九二五
高山通男

印刷所 大分市碩田橋通九二五
高山活版社

不許複製

終